

特別企画

楽器界の雄が呈する、音楽制作の新機軸

Fender STUDIO® 誕生

ギター／ベースの世界的ブランドとして音楽史をけん引してきたFenderが、ついにレコーディング分野への本格参入を果たした。気鋭の音響ブランドPreSonusの技術を背景に、新ブランド“Fender Studio”を設立。楽器メーカーとして培われたプレイヤーの目線と、最新のレコーディング技術が融合した音楽制作における新機軸は、我々の制作環境にどんな変革をもたらすのだろうか。本企画では、注目のDAW “Fender Studio Pro”の開発者インタビューに加え、作編曲家の田辺恵二氏による、Fender Studio Proおよびオーディオ・インターフェイスQuantum LTシリーズのレビューを掲載。楽器界の雄が満を持して呈する、新たな音楽制作エコシステムの真価に迫る。

Photo: Takashi Yashima (p160~161, p168)



Developer Interview

Studio One Pro 7が Fender Studio Pro 8へ

開発責任者が語る誕生の背景

Interpretation: Mariko Kawahara



2026年1月14日(水)、PreSonus からリリースされていた Studio One Pro が Fender Studio にリブランドされ、Fender Studio Pro として生まれ変わった。これに伴い、バージョンも Studio One Pro 7 から Fender Studio Pro 8 へとアップデートされている。サンレコは、開発責任者のアント・カイザー氏、Fender のチーフ・オフィサーのマックス・ガトニク氏に、本件の詳細について話を聞く機会を得た。



我々が焦点を当てているのは
“ユーザーのクリエイティビティ”なんです
—— アント・カイザー

【Profile】アント・カイザー (Arnd Kaiser)。ソフトウェア開発チームのゼネラル・マネージャー。2012年にPreSonusに入社した後、2021年にFenderに入社。ドイツ・ハンブルクにて、Fender Studio Proの製品企画や製品管理を監督する



Studio Oneのレガシーのもと
Fender Studio Proを構築しました
—— マックス・ガトニク

【Profile】マックス・ガトニク (Max Gutnik) | Fenderのチーフ・オフィサーとして、同社の製品事業部全体を統括。Fender入社前は、AvidにてPro Tools部門の管理に携わったほか、Apogee Electronicsに在籍した経験を持つ

すべてのユーザーのための “さらなる良質なツール”に

Fenderと聞けば、“ギター”や“ベース”を思い浮かべる方が多いだろう。今回のニュースを受けて「Studio Oneがギタリストやベーシスト向けのDAWになってしまうのか」と、戸惑いを覚える方もいるかもしれない。しかし、Fenderのチーフ・オフィサー、マックス・ガトニク氏の言葉から、その心配は無用であることが分かる。

「我々は“Fender Studio Pro”という新たな製品を考案しようとしたわけではありません。Studio Oneは幅広いクリエイターからリスペクトされているDAWですから、Fender Studio ProはStudio Oneのレガシーのもとに構築しているのです。一方でFenderにも、市場で認められてきた独自のサウンドとアーティスト・ファース

トの理念があり、長い歴史と伝統を築き上げてきました。Studio OneとFenderのテクノロジーを融合させることで、このFender Studio Proをさらに素晴らしいDAWにすることができると考えたのです」

実際のところFender Studio Proは、Studio Oneの機能を踏襲しながらFenderと密接に結びつくことで、より強力なDAWへの進化を遂げているようだ。

「Fenderのアンプやエフェクト、クリエイティブ・ツールとの連携を強化し、インターフェースを刷新して、モダンかつ直感的なワークフローを実現しました。これまで以上に、アイデアを素早く形にできるようになっているはずです。我々はStudio Oneを進化させて、すべてのユーザーのためのさらなる良質なクリエイティブ・ツールにしたかったのです」

Fender Studio Proの開発責任者は、ソフトウェア開発チームのゼネラル・マネージャー、アント・カイザー氏である。彼は2012年のPreSonus入社以来、Studio Oneの開発・アップデートを手掛けてきた人物だ。今回のアップデートについて伺おう。

「ユーザー・インターフェースをこれほど大々的に刷新したのは、恐らくStudio One 3以来のことだと思います。洗練されたモダンな見栄えにアップデートされましたが、機能を別の場所にレイアウトするような変更はしていないので、従来のStudio Oneユーザーも迷わずに使用できるはずです。また、Fenderのギター・アンプMustangとベース・アンプRumbleが純正のプラグイン・エフェクトとして備わりました。これにより、Fender Studio Proは、Fenderのオリジナル・トーンを提供する初めてかつ、唯一の

DAWになりました。特にMustangは、40種類以上のアンプ、72種類のペダル・エフェクトを備えているので、幅広いサウンドを得ることができます」

FenderとPreSonusの相互交流が エキサイティングな進化を生む

数あるDAWメーカーの中からPreSonusを選んだ理由を、Fenderのガトニク氏に、あらためて尋ねよう。

「PreSonusには、Studio Oneはもちろんハードウェアも含め、素晴らしいテクノロジーの基盤があったからです。PreSonusとFenderがお互いのテクノロジーを共有することで、Fender Studio Proのようなエキサイティングなものを生み出すことができました。彼らのエコシステムが、我々が手掛けていることと、とても良い相乗

効果をもたらしていると言えるでしょう」

もちろん、これまでPreSonusで培われてきたノウハウや音作りの方向性は引き継がれていくという。ガトニク氏が続ける。

「PreSonusの主要設計者や首席エンジニア、アント(編注:アント・カイザー氏)のようなプロダクト・マネージャーは、引き続き開発に取り組んでいます。我々は、PreSonusチームとFenderチームを統合して、さらにパワフルなチームを作り上げたのです。同じ文化的意識を持って、より使いやすい製品の開発に挑んでいます」

従来のStudio Oneを踏襲しながら、より良質なクリエイティブ・ツールへと進化を遂げたFender Studio Pro。「Fender Studio Proは、ギタリストにとって最高のDAWであることは申し上げておきたい。ほかのどのDAWよりも彼ら

のニーズに格段に応えられるはずですよ」と語るガトニク氏に続いて、「とはいえ、Fender Studio Proは“ギター用のDAW”になるわけではありません。当然のことですが、使い方は皆さんそれぞれが決めることです」とカイザー氏は語る。

「ユーザー・インターフェースはアップデートされましたが、ソフトウェアのコードの基盤はStudio Oneと全く同じです。だからこそ、“Fender Studio Pro Version 1”ではなく、“Fender Studio Pro Version 8”なんですよ。重要なのは、我々が焦点を当てているのは“ユーザーのクリエイティビティ”であるということ。演奏する楽器や音楽ジャンルは関係ありません。今後、FenderとPreSonusのテクノロジーの相互交流が多く見られるようになるでしょう。すべてがひとつのブランドの傘下になることで、よりエキサイティングな進化を生むことができるのです」

Product Review

Fender Studio Pro 8

新機能紹介&レビュー

Text by 田辺恵二

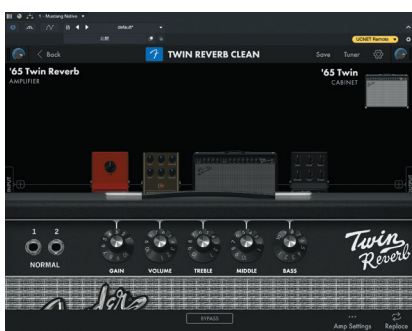
使って納得のバージョン“8”

作編曲家／プロデューサーの田辺恵二です。ドラッグ&ドロップ中心の直感的な操作や軽快な動作、優れた音質で高く評価されてきたStudio Oneが、PreSonusからFenderへとリブランドされ、Fender Studio Pro 8(以降FSP8)としてリリースされました。名称に“8”とある通り、FSP8はStudio One Pro 7を踏襲して正統に進化した最新バージョンです。誰もが知るギター・メーカーのFender(正式にはFender Studio)からのリリースは、Studio Oneの既存ユーザーのみならず、すべてのDAWユーザーに大きな衝撃を与えました。筆者もその一人として、どんなふうに変ったのか興味津々でしたが、使って納得の“バージョン8”でした!

point ①

Fender公認のアンプ・シミュレーターを標準搭載

まずは、Fenderのロゴが堂々に入ったギター／ベースのアンプ・シミュレーター“Mustang Native”と“Rumble Native”。同社のデジタル・マルチエフェクターのフラッグシップ・モデルTone Master Proに似たユーザー・インターフェイスで、Fenderアンプの“あの音”を再現しています。これが、DAW純正のアンプ・シミュレーターということを忘れさせるような音なんです。リアル・アンプ固有のひずみの強弱やエフェクトのかかりが絶妙に変化する挙動も実機に近い印象でした。ギタリストやベーシストから「Fenderの音だ!」と、良いリアクションをもらうことも多いです。



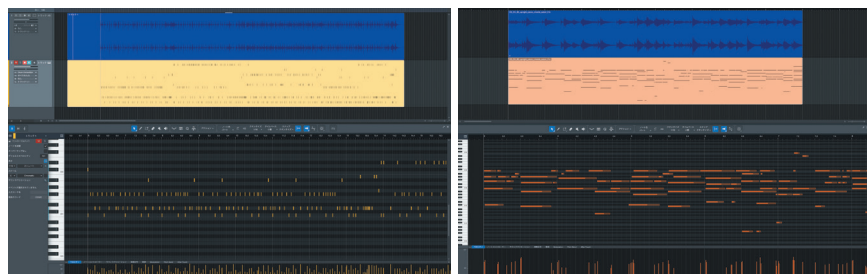
◀ギター用のアンプ・シミュレーターMustang Native。39のアンプ・モデルと73のストンプ・ペダルのほか、200以上のプリセットを備える



▶ベース用のアンプ・シミュレーターRumble Native。20以上のアンプ・モデルと、70以上のエフェクト・ペダル、100以上のプリセットを備える

point ②

高精度&スピーディーなAIベースのオーディオ／MIDI変換



◀ドラムのオーディオをMIDI化した画面(左)と、ピアノのコード・フレーズのオーディオをMIDI化した画面(右)

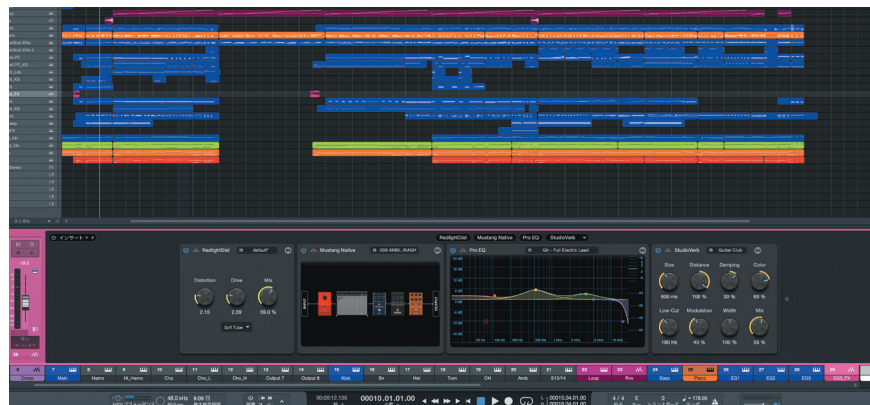
従来も、Studio Oneに統合されているCELESTONY Melodyneを介してオーディオをMIDIに変換することは可能でした。しかし、FSP8では標準機能として、ドラムや音符(ピッチ)を伴うオーディオ素材の変換にネイティブ対応。そ

して驚くべきなのは、その精度の高さと変換の速さです! すべて完璧な結果ではありませんが、音符の解析やドラム・パーツへの割り当てはかなり正確で、さらにはベロシティまでも、元のオーディオのイメージを保ったまま変換されま

す。FSP8に統合された“Splice”“Tonal”“Melodyne”と組み合わせることで、サンプルをMIDI化して自分の思うがままにエディットするという、新たな音楽制作のスタイルが可能になるでしょう。

point ③

プラグイン・チェーンが一目で分かるチャンネル・オーバービュー



▲画面下部に表示されているのがチャンネル・オーバービュー。チャンネルにインサートされたプラグインを一覧して、パラメーターに直接アクセスできる

限られた画面スペースにおいて効率的な作業を可能にする機能が、チャンネル・オーバービュー。最近のトレンドである高性能でコンパクトなノート・パソコンのユーザーには待望の機能でしょう。チャンネルにインサートされたプラグインが横並びに一覧で表示され、信号は左から右へと流れます。プラグイン・エディターを開くことなくパラメーターに直接アクセスできるので、DAWの画面が隠れてしまうことはありません。各プラグインのタブ部分をドラッグして、チェーンの入れ替えをすることも可能です。

point ④

アルゴリズム・リバーブ Studio Verb

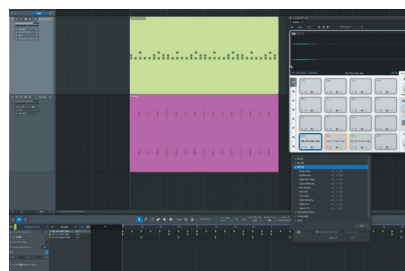


▲新搭載のアルゴリズム・リバーブ Studio Verb

Studio Oneに足りなかった良質なアルゴリズム・リバーブが追加されました。ユーザー・インターフェイスは、一見して分かるレジェンド・リバーブ機器に似ています。その音質の良さは、DAWの再生を止めたときに残るテール音(残響音)で、十分に感じる事ができました。音源なしの状態でもリバーブ音を確認できる“Ping”も、ニヤリとさせる機能でした。

point ⑤

リアルなドラムをメトロノームに

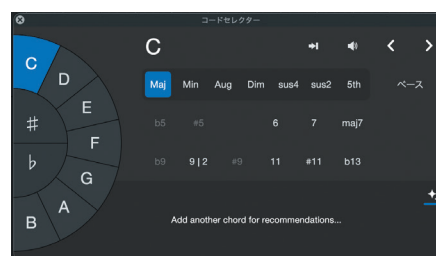


◀ドラム・メトロノームを設定している画面。画面右上はメトロノームの音源として設定しているサンプラーのIMPACTで、画面上部のトラックはドラム・メトロノームのMIDIデータ、下は通常のクリックのオーディオ・データ

今までの電子音的なメトロノーム音だけでなく、リアルなドラム・サウンドをメトロノームに設定できるドラム・メトロノーム機能が備わりました。イメージに合うドラム・サウンドをメトロノームとして使用することで、作曲のアイデアの鮮度を失うことなく音楽制作ができそうです。このドラム・サウンドはアレンジメント・ビューに追加でき、ノート・エディットも可能です。

point ⑥

手癖回避に有用なコード・アシスタント



◀コード・アシスタントの画面

コード・トラックに入力されているコード進行を基に、次のコードをレコメンドしてくれたり、全くコード進行が分からなくても、膨大なパターンから選択するだけでコード進行を作成できるようになりました。特筆すべきは“コードに追従”。これを使えば、コード・トラックを書き換えるだけでMIDIやオーディオが自動的に追従します。例えばワンコードのオーディオ・データを指定のコード進行に変更させることが可能です。コード・アシスタントは、ある程度理論を理解している私にとっても有用。手癖でついいつもの進行にしてしまうのではなく“今回は提案されている別のコードにしてみようか”という気付きを与えてくれるので、ビギナーからプロまで幅広いユーザーにお薦めです。

ほかにも無料のDAWアプリ“Fender Studio”との連携や、既存のインストゥルメント Sample One、Impactの機能アップデートなどなど、さまざまな進化が見られます。堂々のリブランドを果たしたFender Studio Pro。ギターやベースのプレイヤーは、より使いやすく、そして既存のユーザーも違和感なく、さらなる恩恵を享受できるというのが、何よりの驚きかもしれません。

田辺恵二

作編曲家。1991年よりCHARAや古内東子のデビュー・アルバムに参加。及川光博やゴスペラーズのアルバムおよびツアーに音楽監督・作編曲家として参加するほか、SMAP、浜崎あゆみ、柴咲コウ、岡本真夜、AKB48、SKE48らに楽曲を提供する。



全機種 Fender Studio Pro をバンドル！

Fender Studio 発
オーディオ I/O コレクション

ここでは Fender Studio から登場したオーディオ・インターフェース Quantum シリーズをご紹介。どの製品にも、Fender Studio Pro の 6 カ月のデモ版、もしくは永続版が付属するという、大変お得な仕様だ (Fender Studio Pro 永続版は 29,800 円)。なおデモ版は、My Fender アカウント内で \$99.99 にてアップグレードすることができる (価格はすべて税込)。

Quantum LT シリーズ ■価格: LT2: 20,350 円、LT4: 25,410 円、LT16: 68,530 円



◀ LT 2



◀ LT 4

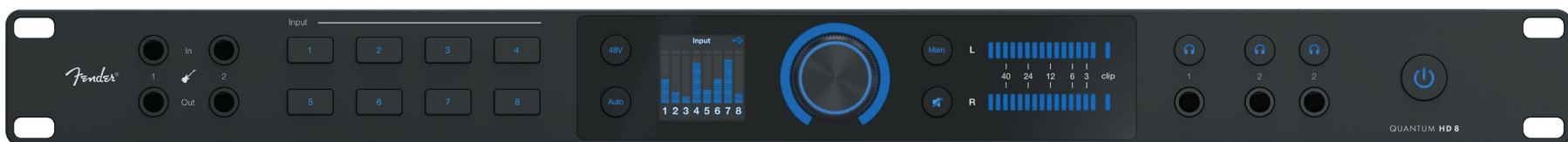


▲ LT 16

Quantum HD シリーズ ■価格: HD 2: 79,970 円、HD 8: 143,550 円



◀ HD 2



▲ HD 8

Fender Studio Pro 永続版が付いてくる
お得なオールインワン・バンドルも！

Quantum Creator Bundle

■価格: 33,660 円



オーディオ・インターフェースの Quantum LT 2、コンデンサー・マイク PreSonus M7、ヘッドホン PreSonus HD7、マイク・ケーブル、デスクトップ・スタンド、Fender Studio Pro 永続版を一式にまとめた、レコーディング用オールインワン・バンドル。33,660 円という価格で、29,800 円の Fender Studio Pro まで付いてくるという大変お得なセットだ。

Quantum Complete Bundle

■価格: 67,100 円



オーディオ・インターフェースの Quantum LT 2、コンデンサー・マイクの PreSonus M7 MkII、ヘッドホン HD7、スタジオ・モニター Eris 3.5 Gen 2、マイク・ケーブル、デスクトップ・スタンド、スピーカー・ケーブル、Fender Studio Pro 永続版を一式にまとめた、レコーディング & モニタリング用オールインワン・バンドル。

Overview

シンプルかつ直感的にレコーディングを行える、最高 24 ビット / 192kHz 対応の USB-C オーディオ・インターフェース。Fender がチューニングした楽器入力、最大 +75dB ゲインの MAX-HD マイク・プリアンプを備える。2 イン / 2 アウトの LT 2 (マイクプリは 1 基)、4 イン / 2 アウトの LT 4 (マイクプリは 2 基)、16 イン / 8 アウトの LT 16 (マイクプリは 8 基) の 3 機種をラインナップし、LT 16 のみ MIDI 入出力も搭載する。LT 2 と LT 4 には Fender Studio Pro の 6 カ月分のデモ版 Fender Studio DEMO が、LT 16 には Fender Studio Pro 永続版が付属する。

Spec

■ビット / サンプリング・レート: 最高 24 ビット / 192kHz
■電源: USB バス・パワー (USB-C) / LT 2 & LT 4、12V DC、2.0A、100-240V、50-60Hz / LT 16 ■対応 OS: Mac (macOS 12 以降)、Windows (Windows 10、11、64 ビット) ■外形寸法: 139.7 (W) × 44.45 (H) × 88 (D) mm / LT 2、178 (W) × 44.45 (H) × 88 (D) mm / LT 4、483 (W) × 44.45 (H) × 127 (D) mm / LT 16 ■重量: 0.51kg / LT 2、0.82kg / LT 4、2.2 kg / LT 16 ■付属ソフト: Fender Studio DEMO (6 カ月) / LT 2 & LT 4、Fender Studio Pro 永続版 / LT 16

Overview

プロフェッショナルな精度を求めるミュージシャンやスタジオ向けの、最高 32 ビット / 192kHz 対応の USB-C オーディオ・インターフェース。Fender が最適化した楽器入力や MAX-HD マイク・プリアンプに加え、録音レベルを瞬時に調整できるオートゲイン・ボタンや、リアンプ出力を備える。20 イン / 24 アウトの HD 2 (マイクプリは 2 基)、26 イン / 30 アウトの HD 8 (マイクプリは 8 基) の 2 機種をラインナップ。両機種とも MIDI 入出力を搭載するほか、ADAT や S/P DIF といった拡張デジタル入出力にも対応し、Fender Studio Pro 永続版が付属する。

Spec

■ビット / サンプリング・レート: 最高 32 ビット / 192kHz
■電源: 12V DC、2A / HD 2、100-240V、50 or 60Hz / HD 8 ■対応 OS: Mac (macOS 12 以降)、Windows (Windows 10、11、64 ビット) ■外形寸法: 215 (W) × 28 (H) × 215 (D) mm / HD 2、483 (W) × 44 (H) × 219 (D) mm / HD 8 ■重量: 1.32kg / HD 2、2.86kg / HD 8 ■付属ソフト: Fender Studio Pro 永続版

Product Review

Fender クオリティの楽器入力、その実力は？ Quantum LT シリーズを 田辺恵二がチェック

PreSonusが長年培ってきたオーディオ・テクノロジーを継承し、現代的かつFenderらしい“プレイヤー目線”のアップデートが随所に施された、Fender Studio 発のオーディオ・インターフェイス Quantum LT シリーズ。次世代のホーム・レコーディングにおける新基準となりうる製品なのか、作編曲家／プロデューサーの田辺恵二氏とともに見ていこう。

プレイヤーとDTMをつなぐ
“架け橋”となる製品だと思います
—— 田辺恵二

田辺恵二

作編曲家。1991 年より CHARA や古内東子のデビュー・アルバムに参加。及川光博やゴスペラーズのアルバムおよびツアーに音楽監督・作編曲家として参加するほか、SMAP、浜崎あゆみ、柴咲コウ、岡本真夜、AKB48、SKE48 に楽曲を提供する。2002 年と 2006 年には日本レコード大賞金賞（編曲）を受賞。映画『ソッキ』など映像作品にも携わるほか、現在はネットTVのMCやラジオ・パーソナリティなど、他分野でも精力的に活動中。

専用のDIに引けを取らない 高品質な楽器入力

Quantum LT シリーズを初めて手に取ったときに、サイドのスリットから覗く内部部品が強く印象に残ったと田辺氏は語る。

「サイドから、たくさんのパーツが入っているのが見えるんですよ。おそらくこれは、熱を放出するための穴だと思います。主観でしかありませんが、それだけこだわった良い部品を使っているんじゃないかと思いました」

出音は、これまでの PreSonus 製品の特徴を継承しているという。色づけがなくフラットで、ヘッドホン・アウトは出力が大きくモニターしやすいそうだ。田辺氏は、本機ならではの魅力として、フロント・パネルの楽器入力を挙げる。

「一般的なオーディオ・インターフェイスだと、フロント・パネルにはマイクとラインのコンボ・ジャックを配置しているものが多いと思うんです。LT 2 と LT 4 は、楽器入力がフロントで、コンボ・ジャックはリア。ギタリストやベーシストの利便性を高めるための配置だと思いますね」

さらに驚くべきなのは、楽器入力にゲイン・ノブがないという大胆な設計だ。初心者ハードルを下げるためだろうと、田辺氏は分析する。

「ギタリストやベーシストって、まだまだオーディオ・インターフェイスに慣れていない人が多いと思うんです。そういう方が初めて使うとき、まずはゲインをどれくらいにするか迷うはず。そういう方でもセッティングに時間をかけずに、すぐ使えるようにしたんだろうなと思いました」

単にゲイン・ノブを排除しただけではなく、内部のインピーダンス・マッチングもしっかりと吟味されている印象だという。

「ギタリスト2、3名と一緒に試して分かったのは、この楽器入力は、楽器専用のDIに引けを取らないくらいの品質だということです。プラグインのアンプ・シミュレーターのかかりもいいですよ。オーディオ・インターフェイスに接続するだけで良い音で録音できるように、ギターやベースに合ったマッチングがされているんだと思います」

操作系においても、大きなメイン・ボリュームを中央に据えたミニマルな構成が、直感的な操作を可能にしている。

「青を基調としたクールなデザインで、作業スペースに置いておくとかっこよく光るし、ツマミの数も最低限。操作に慣れていない人でも、すぐに使い方が分かります」

最大75dBのゲインを得られる マイクブリを搭載

マイク入力についても、上位モデルのHDシリーズと同じMAX-HDプリアンプを搭載し、妥協が一切見られない。

「最大75dBのゲインが得られるマイクブリです。一般的なオーディオ・インターフェイスは65～70dBくらいが限度のものが多いので、この小さなボディで出力が小さいマイクまで対応できるというのは強みですよ。音質はクリアで、プラグインやアウトボードで色づけるのしやすい音だと思います」

Quantum LT シリーズのラインナップはLT 2、LT 4、LT 16の3機種。田辺氏は、個人制作にはLT 2、セッションにはLT 4、ドラム録音や拡張性を求めるならLT 16がおすすめとした上で、中でも4イン／2アウトのLT 4は、セッション時にとても使いやすい構成なのではないか

と強調する。

「例えば、フロントの楽器入力にはギターとベースを、リアにはボーカル・マイクを2つ接続すれば、向かい合ってセッションをすることができます。リアはコンボ端子なので、全員が楽器を演奏することもできますね。意外とこういう構成はほかにはないんじゃないでしょうか。パソコンを接続せずにシンプルなミキサーとしても使用できますし、セッションにはもってこいでしょう」

Quantum LT シリーズは、オーディオ・インターフェイスにハードルを感じているギタリストやベーシストにぴったりと、田辺氏は語る。

「シンプルな設計で良い音を得られるので、プレイヤーとDTMをつなぐ架け橋となり得る製品だと思います。LT 2、LT 4は、軽くてバスパワーで駆動するし値段もお手頃なので、持ち出し用にもお薦めですよ」

Fender Studio Proを 標準バンドル

Fender Studio シリーズには、音楽制作ソフト Fender Studio Pro が付属する点も大きな特徴だ。LT 2 および LT 4 には6カ月間のデモ版（優待アップグレード・パス付き）、LT 16 には永続版が同梱されている。一般的にオーディオ・インターフェイスには機能制限のあるライト版DAWが付属することが多いが、本シリーズでは最初からフル・バージョンを使用できる。Fender Studio には Fender 公式のアンプ・シミュレーターを純正プラグインとして利用でき、Quantum LT シリーズとの組み合わせで高いパフォーマンスを発揮する点にも注目したい。

フェンダー旗艦店で “Fender Studio”の音楽制作を体験しよう！

東京・原宿のフェンダー旗艦店、Fender Flagship Tokyo には、今回発表された新ブランド“Fender Studio”のソフトウェアとハードウェアを実際に体験できる専用エリアを用意。DAWソフトウェア Fender Studio Pro から、Fender Quantum シリーズをはじめとしたハードウェアまで、最新の音楽制作ツールをご体感ください。

■問合せ：フェンダーミュージック Web <https://jp-support.fender.com/hc/ja>